

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 千代 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

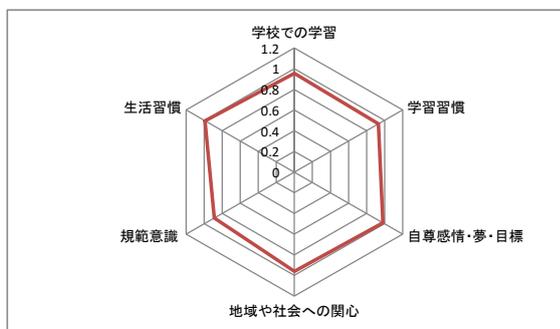
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率								
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均と同程度である。 ・日常的に自分の考えなど文字を書く習慣を身につけさせたい。	全国平均正答率との比較 同程度
	よってきた問題	・文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書く問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う問題の正答率が低かった。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均をかなり上回っている。 ・日常的に読書習慣をつけることにより、さらに力がつくと思われる。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	・話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・目的や意図に応じて、文章全体の構成の効果を考える問題の正答率が低かった。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均をわずかに下回っている。 ・十進位取り記数法、除法の意味理解が不十分のため、授業などで繰り返し取り上げていく。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・180° や360° を基に分度器を用いて、180° よりも大きい角の大きさを求める問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・小数の除法の意味について理解しているかの問題の正答率が低かった。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均をわずかに下回っている。 ・応用問題に対しても、最後まであきらめずに問題を解いている。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・図形の構成要素や性質を基に集まった角の大きさの和が360° になっていることを記述する問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・合同な正三角形で敷き詰められた模様の中に、条件に合う図形を見いだす問題の正答率が低かった。	
理科	全体的な傾向や特徴など	・全国平均と同程度である。 ・最後まで見直しを行い、記述問題にも積極的に取り組み、無回答率が低い。	全国平均正答率との比較 同程度
	よってきた問題	・物を水に溶かしても全体の重さは変わらないことを食塩を溶かして体積が増えた食塩水に適用できる問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・安全に留意し、生物を愛護する態度を持って野鳥のひなを観察できる方法を構想できる問題の正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶を進んでしたり、学校のルールを守ったりする等、生活規律の意識が高い子どもが多い。 ・学校からの宿題を必ずする習慣が定着している。 ・自学についての取組は、各学級で行っているが、計画的に見通しをもって弱点を克服する取組となっている児童の数は少ない。 ・学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることが、「できている」と答える児童は、年々増えてきている。 ・将来の夢や目標を持って日々の学校生活を送っている児童が多い。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ・考えをまとめ、相手に分かりやすく伝える活動を子どもの発達段階に応じて学習活動の中に位置づける。 ・全国学力学習状況調査(6年)や、北九州市学力学習状況調査(4・5年)、観点別学習状況調査(1～3年)へ向けての過去問題を継続的に取り入れたり、学力定着サポートシステムの診断問題や基礎基本定着問題を活用したりする。 ・学び方を学ぶことや、基礎的・基本的な内容の更なる定着に向け、『読む・考える・書く・発表(表現)する』学習活動を丁寧に進めていく。

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ・「家庭学習チャレンジハンドブック」の活用方法について保護者会等、機会を捉えて説明しながら家庭と学校が協力して取り組む。 ・自学ノートや宿題について担任等が丁寧に点検し、価値付けながら進んで取り組む意欲をさらに高めていくようにする。
